

児童厚生一級特別セミナー 実践報告より

地域へ発信、児童館の日常～まんが「こどものせかい」～

京都市明德児童館 阿部 佐織

「のぞき窓」に 漫画を児童館の

京都市明德児童館は平成22年に放課後児童クラブと一体化した児童館として開設しました。洛北は比叡山の麓に位置し、豊かな自然に囲まれています。古くからお住まいの方々のコミュニティに加え、住宅開発が進み、転居して来る子育て世代も多く、幅広い世代が居住しています。今回は、約10年、毎月発行している「こどもせかい」についてお話したいと思います。子どもたちの様々な日常の姿を描き続け、最近ではSNS（Instagram）での発信も定着してきました。

当館は、小学校の敷地内に設置されている上、入口が通りに面しておらず、オープンな立地ではありません。特に開館当初は、自ら門を開けて入るにはハードルが高かったと思います。実際、門扉の前で戸惑っていた乳幼児親子に急いで声をかけに行き、利用につながったこともあります。来館者さんからも「来てみるまでよく分からなかった」「もっと早く来てたらよかった」との言葉を聞くことも少なくありません。

けれども実際の児童館は、乳幼児親子や小学生、中学生と様々な年齢の子どもたちが過ごすアットホームな場所。そういった、文字では表しきれない館内の雰囲気や取組を、保護者や地域の方に知ってもらうためにできることはないだろうか？

か……。そんな悩みがきっかけで、「新聞の4コマ漫画」のように、児童館で過ごす子どもたちの日常を発信してみようということになりました。

私たちに、漫画「こどものせかい」が児童館の「のぞき窓」（児童館を知るきっかけ）となり、存在を知っていただくのはもちろん、地域の子どもたちを身近に感じてほしいという思いがありました。



平成23年6月掲載の第一話

大切にしてきた制作の視点

連載してきた漫画をまとめたのは、令和元年の「開館10周年記念誌」でした。翌年令和2年のコロナ禍では「おうちでじどうかん」として、過去の漫画をホームページに掲載。令和4年の「京都やんちゃフェスタ（WEB開催）」では「どびだせやんちゃんねる」で取り上げられました（期間限定公開）。令和5年には公式Instagramに初投稿をはじめると、「児童館」を発信するツールとして広がりを見せています。

制作時に気を付けていることは、関わった職員が得た感触を逃さないよう、漫画の形にしておくことです。職員同士、毎日の様子をシェアする中で、地域に発信したい姿はたくさんあります。また、作成において大切にできたことを振り返ると、2つのポイントがあります。

- 「児童館を「広報する」視点」
- ①地域の拠点として「だれでも、いつでも」ウエルカムという姿勢を伝える
- ②児童館を知らない方にもイメージやすく描く
- ③具体的なエピソードを通して児童館の機能と役割を伝える

- 「研鑽する」視点をもつ」
 - ①子どもたちの視点・捉え方・考え方・思いを尊重する
 - ②職員同士が互いの視点を学び合う
 - ③職員自身のふりかえり
- 職員一同がこれらの大切なポイントを守り続けてきたことが、10年もの間発信

し続けてこられた秘訣だと思います。「楽しみにしています」「いつも漫画を一番に見てるよ」など、励みになる地域の方々の言葉や、「今回のヤツはなかなかおもしろかった」と小学生からありがたい感じがもたらしたこともありました。今でも記憶に残っているのは、掲載がはじまってまもない頃乳幼児の保護者の方から「児童館の漫画読んでたら、先生たちが子どものことをあたたかく見守ってくれているのが分かるんです」と言われたことです。当時新人だった私は描いていながら「子どもの様子を描くだ

けでそんなことまで伝わるのか」と目からウロコで、この時いただいた言葉は今でも大切にしています。

また、子どもたちにとっても、自分たちが漫画になるのは魅力的なようです。載ってうれしいな、載せてほしいなという気持ちの根っこには、「先生たちが自分をちゃんと見てくれている」という気持ちがあるように思います。

「これからも届け！」ありのままの子どもたち

私が描いていて感じることは、「漫画

だからこそ、読み手に届きやすいのではないかとこのことです。一枚の絵から、雰囲気、人の表情や仕草、感情、物理的な距離感だけでなく心理的な距離感など、様々な要素を汲み取ることが出来ます。また、児童館の多岐にわたる事業やそのねらいが浸透し、子ども主体性や権利を尊重する職員の姿勢が、児童館の総合的なPRにつながるように思います。それも、先に挙げた制作視点を職員みんなで積み重ねてきたからだと感じます。今回の報告を機に「こどものせかい」を振り返ってみると、1つの漫画に色々

な思いをこめてきたのだなあと再認識します。子ども年齢なりの、その時にか見られない姿、奇跡のような出来事、いろいろな子どもたちがいて、どんな姿も愛おしいこと……。職員と子どもたちのありのままの姿、児童館のありのままの様子が、誰かの「行ってみたいよ」「のびやかにならばと願ってやみません」。私たちは、今後も「中身の見える」児童館を目指し、地域の子育て世代の方や子どもたちの利用促進、そして地域の幅広い世代の方々の応援につながるよう、活動していきたいと思えます。



平成28年3月掲載



令和4年8月掲載



令和4年9月掲載



京都市明德児童館【公式】
meitoku_jidoukan_kyoto